

原告意見陳述

原告 越野 武

わたしは、原告の越野 武です。かつては北海道大学工学部、札幌大学化学部に勤めておりましたが、どちらも停年・退職して、今は特に職もない、ごく普通の老人です。それでも10年前の東日本大震災、なakanすく福島第一原発の事故は、十分すぎるほど衝撃的な事件でしたし、一も二もなく原告の一人となったわけです。

今、かつては北海道大学の工学部にいた、と申しました。うつかりすると何か工学技術にかかわるような意見を期待されるかもしれませんが。わたしの専門は建築、それも建築史です。「建築史」は、多分工学部のなかで、最も工学から遠い分野ではないかと思えます。ただ、札幌大学の化学部に移ったとき痛感したことです。工学から遠いところにいたはずのわたしも、実に「工学的」な人間になっているのではないかと思えます。どういことかと言つと、世の中のことを、すべからく工学的、技術的な発想で考えてしまつ、というこ

とです。例えば、航空機が死亡事故をおこす危険度は今では「10億旅客マイル当たり1人以下」だそうですが、「十分安全」と判断して済ませています。

2011年東日本大震災、原発事故で、わたしにとって一番印象的だったのは、ドイツが原発の存廃を倫理的な機関をつくり、そこで議論したこと。人工物の危険度は、許容範囲にあるときは良いのですが、ある限度を超えたとき、技術的な観点だけでは判断できないということです。航空機は許されるかもしれないけれど、多くの人がびとが生きて行くすがを奪うような危険性は、自然災害は別として、決して許してはならないのです。村や町のような住む場所・コミュニティのことですが、奪つてはいけないということです。それは人が普通の生活を安全に続けることができる、という基本的人権、人格権を否定することだからです。まさしく福島原発事故がそのことを誰の目にも明らかに示してくれましたが、これは技術的な議論だけでは結論を得られないようなことだと思えます。

放射性物質の危険度は、少し複雑です。強い放射線が細胞に当たって直接細胞を破壊する場

合もあります。が、それほど強くなくても、遺伝子に損傷を与え、癌を発生させるわけです。これは「当るか、外れるか」全く確率の問題です。当然いろんな数値が示されることになります。日本国政府が避難や帰還の基準に持ちだした20ミリシーベルト／年というのもそうですし、ICRP（国際放射線防護委員会）が2007年に勧告した、一般公衆の総量限度1ミリシーベルト／年というのもあります。環境省のサイトを覗くと、元気な人が「放射線を受けても必ずがんになるわけではないんだね」と発言するイラストが描かれていて、とても吃驚したのですが、それだけを切り出して言えば、そうだろうと納得してしまいます。でも、逆に言えば、



ICRPの総量限度1ミリシーベルト／年なら安全かと言え、そうとも言い切れないことになり。ます。

原子力発電所の危険性、事故を起こす確率については、さらに時間の要素が加わります。何百年に1度あるかどうか、と言われるとわたしどもとしては判断に困ってしまうことになりました。これらも、技術的判断を超えた倫理的な判断を迫られることだと思えます。

東日本大震災よりだいぶ前のことですが、「研究者と倫理」という新聞コラム欄の記事がありました。全国の公的研究機関の研究者を対象とした文部科学省の調査結果で、自分の研究の社会的悪影響に対して責任を負うべきだと答えた研究者は、65歳以上で67%だったのに対し、35歳以下では27%しかいなかった、ということでした（北海道新聞夕刊04・10・12）。数字そのものは変わっているでしょうが、現役の研究者のものの考え方の基本を暴いていると思えますし、もちろん原発を支える技術者に通することです。

かつて大学の教官だったわたしにとっても危惧しているのは、倫理的な裏打ちがないときは教育「工学技術教育」の荒廃をまねくのではないかということ

す。北海道大学は入学後4年のうち、おおむね1年半で専門の学部学科を決める制度になっています。若い世代の専門家の卵たちが、自分の専門分野を決めるわけで、教官も、若い世代が世の中の動きにたいへん敏感に反応する、その帰趨を目の当たりにすることになります。重要なものごとを決める際に、倫理的な裏打ちがわたしどもも心しなければならぬことだと思えます。言い添える必要もないことですが、原子力工学が不要になるということは、放射線医療ひとつをとっても、考えることもできません。仮に原発が廃止されても、原子炉を廃棄するための大変な作業が必要ですし、そのためには優れた工学技術者がいなければなりません。今の段階でわたしどもが廃炉を決めることは最低線の倫理的な判断、裏打ちであり、工学技術者をめざす若者を支える基盤として不可欠だと考えています。

この裁判のそもその出発点は、泊原発の存在がわたしども的人格権を脅かすものだ、というこに始まっています。

どうぞ、この裁判では原点に還って、泊原発を廃炉にする判決を出されるよう、わたしからもお願いいたします。